

特集

# 新たなモンゴルとの出逢い ——モンゴルの100年前と今



一〇〇年の時を経て出逢う写真たち 島村 一平  
ウランバートルの新旧住宅事情 滝口 良  
聖なる都市ウルガ テレキ・クリスティナ  
写真で見る街の移り変わり 小長谷 有紀



# モンゴルが照射する自然Ⅱ社会

みなとちひろ  
港 千尋

風景を考えるとというテーマのもと、モンゴルの首都ウランバートルで現代美術展を開催したことがある。東日本大震災で変貌した風景を目の当たりにして、写真家のみならず多くの人が考えざるを得なかったことを、日本とモンゴルのアーティストが作品にして共同で開催する、初の試みだった。それぞれ七名ずつの参加だったが、オープニング目前にしてモンゴルの作家が揃っていない。ふたりほどギャラリーに姿を見せないで、モンゴル側の共同ディレクターに聞いてみると、彼らはいまどこか遠くにいるという。どこが遠く？ 恐る恐る聞いてみる。

それで……作品は？

草原のどこかにあるのですが、わかりません。

草原？

けつきよく作家は最後まで姿を見せなかったのだ

が、そこでわたしは、想像もしていなかった、壮大な距離の存在に気づかされたのだった。ギャラリーや美術館で展示することを当たり前と思っていた自分、それが当たり前ではないスケールの人間がいる風景と出会ったのである。

現代モンゴルの人々と彼らの生活を写す写真家インジナーシの作品には、ダイナミックな風景とともに、そこで生きようとする小さな姿が現れる。美しい草原を背景にした道路標識と背後に立つ人の影。標識の周りをまるで子供え物のように取り囲むのは、ウォッカの空き瓶だ。別の写真では、少年がふたり自転車に乗ったまま、道端で倒れた人を覗き込んでいる。キャプションからそこがゴビ砂漠であること、そして倒れているのは酔っ払いの男だとわかる。モノクロームの風景をなす三人の周囲には

何も無い。背景の山なみは近いように見えて、数十キロも離れていることを、わたしはゴビ砂漠で知った。日本の湿度と空気に慣れた距離感覚は、ここには役に立たない。

貧困、アルコール依存、家庭内暴力、差別と偏見……インジナーシの写真があぶりだすのは、急激な都市化が生み出す矛盾と孤独に苛まれる人間の姿である。もともと厳しい気候に加えて、近年は気候変動の影響を大きく受けている。地下資源開発による環境破壊も深刻だ。そこでの自然と社会は切り離すことのできないひとつの実体であり、そのどこを切り取ってもモンゴルのいまが顔を見せる。インジナーシは自然Ⅱ社会風景に寄り添うようにして、レンズを向けるのだが、その眼差しはどこまで優しい。

作品を作ること、生きることが常に踵を接する問いとなるような土地から、これらのイメージは、われわれが生きる現代文明を照射しているように思う。

## プロフィール

1960年神奈川県生まれ。写真家。映像人類学専門。イメージの発生と記憶などをテーマに活動を続けている。写真展「市民の色」で伊奈信男賞を受賞。写真集に『瞬間の山』(インスクリプト)、『掌の織文』(羽鳥書店)、著書に『現代色彩論講義』(MEI)など多数。最新刊に『写真論』(中央公論新社)。現在多摩美術大学情報デザイン学科教授。

## 目次

- 1 エッセイ 千字文  
モンゴルが照射する自然=社会  
港 千尋

## 特集

### 新たなモンゴルとの 出逢い

—モンゴルの100年前と今—

- 2 100年の時を経て出逢う写真たち  
島村 一平
- 4 ウランバートルの新旧住宅事情  
滝口 良
- 6 聖なる都市ウルガ  
テレキ・クリスティナ
- 8 写真で見る街の移り変わり  
—あるいはバック・トゥ・ザ・フューチャー—  
小長谷 有紀
- 10 みんぱく回遊  
角を求めて  
林 勲男
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド  
マニラのアート巡りのすすめ  
古沢 ゆりあ
- 16 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界  
しめ縄探訪事始  
中谷 文美
- 18 シネ倶楽部 M  
モンゴル発のヒップホップの  
動態に迫る  
—「モンゴリアン・プリング」—  
川瀬 慈
- 20 ことばの迷い道  
「左は東」で「右は西」か？  
辛嶋 博善
- 21 編集後記・次号の予告

## 表紙

上: チョコ・ナイトクラブ (撮影: B.インジナーシ、ウランバートル、2017年 ©Injinaash, Bor)

下: 草原の若者たち (撮影: S.バルシ、セレンゲ県、1909年、フィンランド文化遺産庁民俗画像コレクション ©The Finnish Heritage Agency)

# 特集 | 新たなモンゴルとの出逢い — モンゴルの100年前と今

今回の特別展はその名のとおり、100年前の写真と現在の写真たちが特別展会場に出逢うというものである。100年前の欧米を中心とした探検家たちの「辺境」モンゴルに対するまなざしと現代モンゴル人の自らの社会に対するまなざし。本特別展は、こうした写真をめぐる100年の時空を越えた邂逅—出逢い—をテーマにして企画されている。

日本・モンゴル外交関係樹立50周年記念特別展

邂逅する写真たち  
— モンゴルの100年前と今

会期：2022年3月17日(木)～5月31日(火)  
場所：特別展示館



## 100年の時を経て出逢う写真たち

島村 一平

民博 学術資源研究開発センター

いきなりだが、二枚の写真を見比べてほしい。モンゴルといえば、どちらのイメージが我々にとってなじみ深いだろうか。おそらく上の写真だという方がほとんどであろう。

じつは、上の写真は、ロシアの探検家にして考古学者、ピョートル・コズロフが一九二〇年代にオロク湖付近で撮影した遊牧民の男たちの写真だ。一方、下の写真は、現代モンゴルにおけるドキュメ



上：オロク湖群のモンゴル人たち（撮影：P.K.コズロフ、1926年、ロシア地理学協会蔵、チンギス・ハーン博物館提供 ©Russian Geographical Society/Chinggis Khaan Museum）

下：グランジロックのバンド「ニスパニス」のライブでヘッドバンギングする若者たち（撮影：B.インジャーシ、ウランバートル、2017年 ©Injinaash, Bor）

ンタリー写真の若き旗手、B・インジャーシが二〇一七年に撮影したロックコンサートの様子だ。一〇〇年前、馬に乗りキセルをふかす遊牧民の青年たちは、今やライブ会場でヘッドバンギングをしている。およそ一〇〇年前、多くの探検家たちが中央アジアを目指し、モンゴルに到達した。探検家たちは多くの写真を残し、それらは現在にも伝わっている。現在、研究者はもちろん現代のモンゴルの写真家たちも自らの社会を見つめ、写真で表現するようになった。本特別展は、こうした写真をめぐる一〇〇年の時空を越えた邂逅—出逢い—をテーマにして企画されている。

### モンゴル人写真家が写す現代ウランバートル

この「邂逅」—出逢い—は、さまざまな意味を含んでいる。右頁の写真を見てわかるとおり、下のロック少年たちは我々日本人にはあまりなじみのないモンゴル人像かもしれない。なぜなら日本では、モンゴルといえば「遊牧民」「大草原」「モンゴル相撲」といったイメージが強いからだ。しかし現在、モンゴル国において、遊牧民の人口はもはや九パーセントに過ぎず、むしろ



上：ボグド・ハーンの黄の宮殿（撮影：ステファン・パセ、ウルガ、1913年 ©avec le concours du Département des Hauts-de-Seine - Musée Départemental Albert Kahn）

下：政府宮殿。中央に巨大なチンギス・ハーン像が鎮座している（撮影：B.インジャーシ、ウランバートル、2021年 ©Injinaash, Bor）

首都ウランバートルに総人口の約半分（二六〇万人）が集中している。つまり、この特別展では、我々にとって新たなモンゴル像、つまりモンゴルの都市世界との出逢いが待っている。展示では、グローバル化する首都ウランバートルの悲喜こもごもを写真家B・インジャーシが活写している。

### モンゴルの一〇〇年前と現在

現代に至るまでモンゴルに都市がなかったわけではない。一〇〇年前のウランバートルは、ボグド・ハーン（活仏ジェブツンダンバ・ホトクト八世）が治める宗教都市ウルガだった。この都市の中心部には、「黄の宮殿」とよばれる、黄金のゲル型宮殿・寺院があった。まるで天守閣のような美しい高殿は、金箔で覆われた楼閣であったことを当時のロシアの東洋学者、A・M・ポズネーエフは書き残

している。本特別展で来館者は、フランスのアルベール・カラン美術館に残る唯一のカラー写真を通じて在りし日の「黄金宮」の姿を見ることができ

る。現在、ウランバートルの中心部に聳えるのは、白亜の政府宮殿である。政府宮殿の中央には、巨大なチンギス・ハーン像が座している。二〇〇六年、この像は、チンギス・ハーンの即位八〇〇周年に合わせて造られた。宗教国家であったモンゴルは、社会主義を経て現在、チンギス・ハーンをシンボルに抱きながらも共和制国家に生まれ変わったことを左上の二枚の写真は如実に伝える。つまり本特別展におけるもうひとつの出逢いとは、過去と現在の出逢いだといえよう。

### モンゴルの都市世界と草原世界

本特別展の一階展示場の左右には、一〇〇年前のモンゴルの宗教都市ウルガの世界と、現代の首都ウランバートルの世界が対峙している。一方、二階は草原世界の一〇〇年前と今だ。探検家たちが見たおよそ一〇〇年前の遊牧世界が会場に現出する。アメリカ、ロシア、ノルウェー、ポーランド、スウェーデン、そして日本。さまざまな国からモンゴル高原を目指して訪れた探検家や宣教師といった人びとの目に映った草原はいかなる姿だったのか。そして現在、草原と遊牧民の世界は、鉱山開発や観光地化などによって変貌を遂げつつある。一〇〇年前のモンゴルと現代のモンゴル。いずれも特別展を通じて新たなモンゴルと出逢えるはずだ。

# ウランバートルの新旧住宅事情

滝口良

国際協力機構専門家

モンゴルの首都ウランバートルを訪れて驚く人は多い。草原でゲルに暮らす遊牧の民の印象は、その発展した街の姿に裏切られる。ウランバートルはモンゴルの人口の半数近くが集まる一極集中都市である。急速な発展と建設ラッシュのもとで、この街には新旧の住まいが共存している。

## ふたつのタイプの住宅

ウランバートルの住宅は大きくふたつに分けることができる。そのひとつが都市中心部の集合住宅群である。ウランバートルでは社会主義時代にあたる一九五〇年代以降に団地建設が開始され、街には画一的な住宅が立ち並んだ。社会主義体制の崩壊後、二一世紀になって経済が向上くと、あらたに住宅建設ラッシュが始まった。現代的なマンションがところ狭しと乱立し、街の外観は一変してしまった。

ウランバートルのもうひとつの住宅のタイプは「ハシャー」である。ハシャーは「四方を柵で囲った敷地」を意味する。ハシャーの住民は、四〇〇〜七〇〇平方メートルの敷地に遊牧民の伝統的住居「ゲル」や木造・煉瓦造などの家屋を建てて暮らしたことがある。

ハシャーの敷地の面積は広く、ゲルや家屋を組み合わせれば複数家族が容易に同居することができ



ウランバートル北部のゲル地区。ひとつのハシャーのなかに複数のゲルや家屋が建てられている(ウランバートル、2012年)

らしている。集合住宅地帯をとり囲むように街の周縁部に広がるハシャーの住宅地帯は、「ゲル地区」とよばれる。大部分のゲル地区では電気は引かれていないが上下水道のインフラはなく、石炭をストーブにくべて暖をとっている。ウランバートルの約半数の住民がこのゲル地区で暮らしている。

## ハシャーの歴史と今日の問題

ハシャーという住まいの歴史は古い。二〇世紀初頭に描かれたこの街の絵図を見ると、街の各地にゲルや固定家屋と、その四方を木柵で囲った区画が並んでいるのを確認することができる。ハシャーという住まいは、モンゴルで集住がおこなわれるときのひとつの伝統的形態だったのである。

社会主義時代になると、ハシャーは大規模団地の開発により街の中心部から立ち退き、周縁部に追いやられた。これが今日のゲル地区の起りである。当時の計画ではゲル地区は団地建設により順次解消される予定で、それまでは暫定的な住宅エリアとして存続することになった。しかし計画に反してゲル地区は解消されず、それぞれ



ハシャーの内部。ハシャーの主は煉瓦造の家屋に住み、一時的に身を寄せた主の友人がゲルに暮らしていた(ウランバートル、2009年)

きる。ゲル地区ではさまざまな理由で親戚や知人のハシャーに一時的に身を寄せて暮らすことがめづらしくない。ハシャーでは普段は家屋に住んでいる家庭であってもゲルを畳んだ状態で保管していることがよくある。こうした予備のゲルは、家族が増えて家が手狭になったとき、田舎から親戚や知人が移住してきたとき、集合住宅の家庭で子ども世代が独立して住まいを求めるときなど、ライフコースのなかで住まいが必要になる機会に応じて、たやすくあらたな住



開発の進むウランバートル中心部。狭い空間に高層ビルやマンションが乱立している(2021年)

ろか社会主義体制が崩壊すると、ゲル地区の面積は急速に拡大していく。ゲル地区は、今度はウランバートルの急速な人口増加の受け皿となったのである。無計画に拡大していくゲル地区に対して過去二〇年近く開発が進められてきたが、決定的な解決には至っていない。

## ハシャーが支える都市

社会主義と資本主義というふたつの体制をまたぎ、ゲル地区の周縁化が試みられてきたことにな



ハシャーの内部。広い空間は子どもが走り回って遊ぶのにもぴったり(ウランバートル、2014年)

まいを準備してくれるのだ。ハシャーという住まいは、複数の家庭を受け入れることのできるその柔軟さによって、ウランバートルの住宅不足を緩和する役割を果たしてきた。団地住宅の供給が不足していた社会主義時代や、また不動産価格の高騰で容易に住宅を手に入れることができない今日のような状況下で、一時的な住まいを提供できるハシャーは非公式な「住まいのセーフティネット」として機能してきたのである。ウランバートルでは今日もあらたな開発の空間を求めては建設が繰り返されている。今後はゲル地区がその直接のターゲットとなっていくことだろう。こうした変化のなかで、ハシャーという住まいはどのように変わっていくのだろうか。

# 聖なる都市ウルガ

テレキ・クリステイナ

エトヴェシユ・ローランド大学研究員

## 移動する寺院都市

モンゴルの仏教寺院は、一七世紀より移動を繰り返していたが、一九三〇年代までには、固定化されるようになった。ウルガ、つまり今日のウランバートルも一七世紀にザナバザル、すなわち活仏（フツブ）ジェブツンダンバ・ホトクト一世（一六三五〜一七三三年）が野営した天幕群が基礎となって生まれた都市である。ザナバザルは、チベット仏教黄帽派（ゲルク派）をモンゴルに導入した人物でもある。彼の転生者たちも一生を通じて移動生活をし、天幕群はモンゴル最大の移動寺院都市へと発展を遂げていった。そこはモンゴル人にとって仏教を学ぶ場であると同時に巡礼地であった。また清朝の出先機関や対中・対口貿易の拠点でもあった。こうしてウルガは二八回の移動を経て、一八五五年にトール川河畔の現在の地に定着した。ウルガは、チベットの都ラサに匹敵する壮麗さを誇ったといわれる。

## 聖なる都の構成

二〇世紀の初頭、清朝が崩壊したとき、ウルガ

はその全盛期を迎える。この都の主であるジェブツンダンバ・ホトクト八世がボグド・ハーン（聖なる皇帝）として即位し、この国を統治することとなった（一九一〜一九二二年）。彼は、新しい寺院の建立や芸術家の活動を支援したほか、地方寺院の僧侶たちに戒律を遵守するよう働きかけた。

ボグド・ハーンの聖なる都は以下のような街区で構成されていた。東フレイとよばれた主要な寺院が集まった街区。ここはこの都市で最大の街区であり、ボグド・ハーンの「黄の宮殿」や僧侶の会堂、弥勒寺があったほか、医学部・密教学部・時輪学（天文学）の学問寺もあった。これらを囲むように僧侶たちの住まう三〇の小区があった。西フレイ、別の名をガンダンといい、ガンダン寺を中心とした寺院区には、僧侶養成学校である顕教（仏教哲学）の学問寺が三寺あった。また大観音堂やジェブツンダンバ五世や七世の遺骨を納めた仏塔もこの街区にあった。西フレイも三〇の小区にわかれており、ここで僧侶たちが暮らしていた。地方の王侯貴族を含む俗人たちの居住区。トール川のほとりの宮殿寺院群。国事にかかる託宣をおこなうチョイジンラマ寺院。ボグド・ハーンの「緑



ジュグテル画《ボグド・ハーンのフレイ》1913年（ボグド・ハーン宮殿博物館蔵 ©Bogd Khaan Palace Museum）

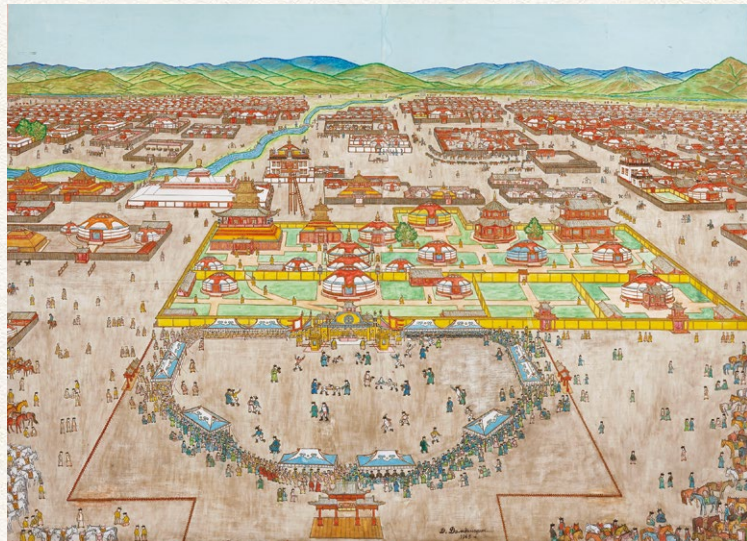
## 都でおこなわれた仏教儀礼

ボグド・ハーンの聖なる都は、彼の統治期は権威ある寺院や三大学問寺、出家者として具足戒を受けた僧侶たちを一万人も擁していることや、大弥勒像や大観音像が座していることで名を馳せていた。多くの人がびとが、この都市で毎年、毎月、毎日おこなわれる仏教儀礼に魅せられた。黄の宮殿前広場では、毎年、仮面舞踊儀礼ツアムやボグド・ハーンの長寿を祈るためのスポーツの祭典ナーダムが催された。春には、緑の馬が引く馬車に乗った未来仏・弥勒菩薩が市中を巡回する儀礼であるマイダル祭りもおこなわれた。また旧正月を祝う儀礼は、市中のすべての寺院でおこなわれていた。また大型の仏塔やマニ車が寺院街区を囲む道路脇に置かれ、信心深い多くの巡礼者たちは、ここで祈りを捧げていた。地方からやってきた善男善女たちは、親戚の僧侶を訪ねてウルガにやってくると、その



現在のマイダル祭りの緑の馬（2021年、ダシチョイリン寺院提供）

の宮殿、「白の宮殿」。一八六一年に開設されたロシア領事館の地区。中国人商人街である買売城（アマイエン）絹や錦などの布類や茶、煙草、菓子、小麦粉、仏具などが一九二〇年代まで売られていた。東フレイとガンダン寺のあいだの市場。ウルガの住民と来訪者が買い物を楽しむ市場である。大工、鍛冶屋、靴屋、肉屋や、その他職人、ミルクや馬乳乳売り、乳製品屋などが商売をしていた。またこの市場では、家畜や薪、干草などの取引もなされていた。



黄の宮殿前広場。D.ダムティンスレン画《フレイ・ナーダムでのモンゴル相撲》1965年（ザナバザル美術館蔵 ©The Fine Arts Zanabazar Museum）

寺院に布施をする。この布施収入が僧侶の食費や儀礼費、建物の修理代といった寺院の維持費となっていた。またウルガのほとんどの寺院は、布施として寄付された家畜群を有していた。

## モンゴルの仏教芸術の盛衰

ボグド・ハーンの治世下で仏教芸術も活性化した。新築された「緑の宮殿」は、ボグドの冬の宮殿と寺院の融合施設であるが、内装・外装ともにモンゴル様式とチベット様式、中国様式が混ざった独特の建築物である。ウルガでは、ツアムの仮面や衣装が修繕・修理されたほか、市内の木版印刷工場では仏教の経典が印刷され、一九一〇年ごろ完成したチベット大蔵経ウルガ版カンギル（仏説部）が出版されていた。また仏師たちによって卓越した絵巻物や絹の刺繍の仏画も製作された。

その後ボグド・ハーンの都は、ウンゲルン男爵による占領や人民革命を経て生き延びたが、一九二四年に社会主義が始まると徐々に抑圧されるようになる。一九三七〜三八年の宗教弾圧による寺院破壊を免れたのは二の寺院のみだった。それらはガンダン寺、チョイジンラマ寺院博物館、ボグド・ハーン宮殿博物館などで、衰えたモンゴルの仏教文化を今に伝える貴重な資料となっている。そこに残されたチベット語・モンゴル語の年代記や経典、公文書資料に加えて、海外の探検家たちの書き残した記録と写真は、当時のモンゴルの聖なる都ウルガの日常を我々に教えてくれる重要な資料なのである。

（翻訳・島村一平）

# 写真で見る街の移り変わり

——あるいはバック・トゥ・ザ・フューチャー——

小長谷 有紀

日本学術振興会監事  
民博客員教授

モンゴルはソ連に続いて世界で二番目に社会主義を採用し、一九二四年、モンゴル人民共和国が成立した。六五年を経て一九八九年、ベルリンの壁が崩壊すると、いわゆる民主化の波が草原にも押し寄せ、一九九二年にモンゴルは完全に社会主義を放棄して「人民共和」という表現を削ぎ落とし、モンゴル国に改称した。社会主義の選択と放棄という二〇世紀の大きなうねりを経験したのである。

## 「〇〇ミヤンガの人」

こうした劇的な変化を首都ウランバートルは強く反映している。一九一九年の人口はおよそ六万人であり、社会主義時代には五〇万人規模の都市として計画され、ポスト社会主義期を経て現在では一五〇万人を超えている。今も増加し続ける人口を吸収しているのは周辺部である。丘陵の頂上まで広がるゲル地区や、河畔の高層マンション地区である。

一方、中心部では、活仏の政務所に代わって、国会議事堂など新しい政治体制をなう公共建築がつくられた。その後、全国から公務員や工場労働者としてウランバートルへ移住してくる国民の

ために、中層住宅も建設されていった。一九六〇年にソ連が四万平方メートルのアパート地区の建設を約束すると、対抗して中国も五万平方メートルのアパート地区の建設を約束した。それぞれ四万（ドチンミヤンガ）、五万（タウインミヤンガ）とよばれている。「〇〇ミヤンガの人」といえば、これらの地区で生まれたウランバートル育ちの、今日の熟年層を指す。

## 市場のぎざい

こうした計画に基づいて徐々につくられていった都市空間は、二〇世紀末以降に急変するが、その原動力となったのは市場経済化である。その市場という概念をモンゴル語で「ザハ・ゼール」という。「ザハ」はもともと縁辺を意味し、「ゼール」は街路を指す。

首都がウルガなどとよばれていた時代には、中央にある寺院地区「フレー」の東西縁辺に「ダムノールチン（棒かつぎ屋）」とよばれる商業地区の街路があった。たしかに、縁辺にあつて街路で構成されていたのである。ただし、そこはもともと中国商人たちによる店舗であり、モンゴル人による売



棒かつぎ屋の姿も描かれている。ジュグデル画《ボグド・ハーンの前》(部分)1913年 (ボグド・ハーン宮殿博物館蔵 ©Bogd Khaan Palace Museum)



通称「肉市場」の野菜売り場。ソ連から赴任したI.A.チチャエフ氏のアルバムより (ウルガ、1914年ごろ From the Album of I. A. Chichaeu)

あるモンゴル人女性は「今の美術館が、当時唯一の百貨店だね。あのなかで迷子になったもんだよ。娘や孫娘が、なんとまあ、あんな小さなところで何で迷うもんかと言うけれど、ほんと、そりやもう迷ったんだよ……。百貨店からガンダン寺まではあたり一面中国人の店だった。道の両わきに店が並び、店と店とのあい



「肉市場」の全景。BAT英米タバコ会社から派遣されたO.マーメンのコレクションより(1920年代、オスロ大学文化史博物館蔵 ©The Oscar Mamen family/The Museum of Cultural History, University of Oslo)

り場は、当該地区のさらに縁辺部に、通りを用いた露店やゲル店舗として広がっていた。

右下の写真は、通称「肉市場」の一角である。モンゴル人女性が野菜を買いに来ている。一九二三年にソ連の対外情報部からモンゴルへ派遣されたI・A・チチャエフ(一八九六〜一九八四年)氏のアルバムに貼られていた写真である。写真の背後に見える建物のうち、左は一九一〇年に開業した薬屋で、右は当時建設中のロシア商店である。どちらも現在再利用されているが、特に右のザナバザル美術館は、社会主義時代初期、「ウンドゥル・ホルシヨー(のっぽの協同組合店)」とよばれていた。一九三二年に生まれ、一九四九年に上京してきた



現在のザナバザル美術館となった「ウンドゥル・ホルシヨー(のっぽの協同組合店)」の建物(1940年代、モンゴル国立公文書館蔵 ©National Archives of Mongolia)

## 変わるもの変わらないもの

だにはいやもう、まったく隙間なんてありやしない。彼らの店には、売らないものはない。何でもかんでも売られてた」と、街の思い出を語る。

一九六〇年代に、白い壁の長い商店街が建設されると、通りは「オルト・ツァガン(長い白)」とよばれるようになった。わたしが留学した一九七九年ごろは、指輪など貴金属製品を扱う小さな店が並んでいた。通りの西端には、現在、ショッピングモールがある。

このように、建築は変化化したものの、中心部から西へ伸びる広い街路という当該の場所に与えられた商業機能はむしろ一貫しているといえよう。およそ一〇〇年前の写真は、したがって、すでに消えた過去とともに、今に至るそこからの未来も示している「バック・トゥ・ザ・フューチャー」なのである。

## 仮面の角

わたしが民博に着任した一九九四年当時、オセアニア展示場には壁一面にかなりの高さまで仮面が並ぶ一角があった。今はニュージランドのマオリの工芸活動を紹介するコーナーとなっているところである。

当時のオセアニア展示場は、一九七七年の開館以来「海の民族」「くらし」「儀礼の世界」の展示を基本とし、一九八一年に「儀礼の世界」にオーストラリア先住民関連の資料を加えて、「オーストラリア・アボリジニの精神世界」のコーナーを設けていた。そのおもな狙いはいわゆる「伝統的生活」を紹介することだった。なかでも最後の「儀礼の世界」に展示された、さまざまな神像や祖先像そして大きさも素材もじつに多様な仮面は、見る者を圧倒する迫力があった。

そこに並ぶオセアニアの仮面を眺めながら、角が生えたものがないのは、白人入植者による牛や鹿などの導入が比較的遅く、それまではこの地域に角をもつ野生動物がいなかったことや、キリスト教の布教活動のなかでの宗教画などによる角をもつ悪魔のイメージが浸透していないことが、仮面の意匠に影響を与えているのかと漠然と思っていた。

## 角探し

二〇一七年三月、約一〇年におよんだ本館展示場の新構築を完了し、伝統的な生活を紹介するために同種の標本資料を集中的に展示するコーナーは一部を除いてなくなり、現代的なテーマや当該地域と日本との関係を紹介する展示などがあらたに加わった。この間に東日本大震災が発生し、東北の被災地支援のためにわたしは鹿角を探し求めたわけだが、今回の記事執筆にあたり、改めて民博の本館展示場でも角探しを試みた。

民博は、世界各地の「骨角器」を数多く収蔵している。「骨角器」とは角や骨、牙などを材料として加工した道具や装身具などを指す。釣り針、鋸、矢じり、スプーン

などの道具類、そして首飾りや耳飾り、髪飾りなど



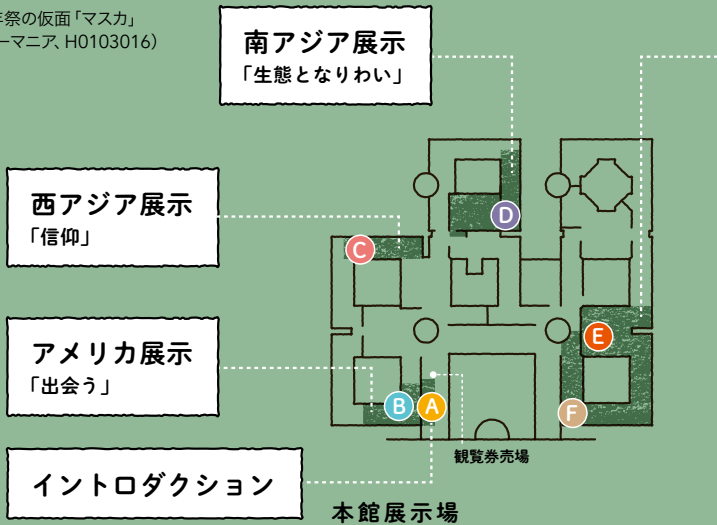
みんぱく回遊

## 角を求めて

林 勲男  
民博 超域フィールド科学研究部



E としどん(鹿児島県、H0062047ほか)



西アジア展示  
「信仰」

アメリカ展示  
「出会う」

イントロダクション

南アジア展示  
「生態となりわい」

日本の文化展示  
「祭りと芸能」



B ウシの仮面 (メキシコ、H0126922)

C 牛頭の錫杖 (イラン、K0006567)

D ヤク頭部の剥製 (ブータン、H0126898)

A 越年祭の仮面「マスカ」 (ルーマニア、H0103016)

H、Kからはじまる番号は標本番号です。

## 鹿の角

二〇一一年三月、東北地方太平洋沖地震が発生し、大津波が東日本の太平洋沿岸を襲ったことで、甚大な被害に見舞われた。災害発生からひと月ほど過ぎ、やっと訪れることができた岩手県で、民俗芸能関係の雑誌を編集している方にお会いして、被災地の民俗芸能の被害について話を伺った。メンバーを亡



F 笠崎鹿踊の装束 (岩手県、H0270353ほか)

くした団体が複数あり、衣装や道具類を津波で流されてしまった例も数多くあることを知った。衣装や道具類は、補助金や救援金などで新調することはできても、装束に必要な、長さや枝の数などの条件を満たす本物の鹿の角探しに苦労していると聞いて、支援を申し出た。知り合いの猟師や鹿肉加工業者、地方紙の記者を通じて、兵庫県、京都府、長野県内から見栄えのする鹿角を提供してもらい、被災した三つの鹿踊保存会に合計四六対を送った。角はそのまま使うのではなく、研磨して白く美しく加工し、漆で仕上げた鹿



わたしが集め、保存会会長が白く磨き上げた鹿の角 (岩手県大船渡市、2011年)

の装身具である。実際に、本館展示場で紹介されているものはほんの一部に過ぎない。一方、角を角として取り付けた仮面や、本物の角ではないが別の素材で角を表現している仮面、被りものは複数の展示場で目を引く。圧巻は、さまざまな仮面が壁面に並び日本の文化展示の「仮装」のコーナーである。ここにある仮面は角があっても、悪魔や鬼をあらわしているとは限らず、むしろ邪気を祓い、福を招き寄せる来訪神とみなされているものが多いようである。狩猟の獲物としてもち込まれた鹿や、食用・搾乳用に導入された牛や山羊などの動物、あるいはキリスト教の悪魔などがあらたな民俗的イメージを形成し、それが角のある仮面に表現されることが、果たしてあるのだろうか、オセアニア展示場にふたたび立つて思いを馳せた。

# みんなく インフォメーション

## 重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

## イベント予約はこちら

みんなくホームページ  
催し物のご案内

<https://www.minpaku.ac.jp/event>



### 特別展

日本・モンゴル外交関係樹立50周年  
記念特別展

## 「邂逅する写真たち」 モンゴルの100年前と今」

モンゴルの100年の変貌を写真で辿る体験型の「写真展」です。大草原と遊牧民とは異なるモンゴルに出逢えます。  
会期 3月17日(木)～5月31日(火)  
会場 特別展示館

### ■関連イベント

みんなく映画会  
「ヒップホップから見た  
現代モンゴル社会」  
映画「モンゴリアン・プリング」  
から考える」

モンゴルのヒップホップをテーマにしたドキュメンタリー映画を上映すると同時に監督や出演者が国境を越えた座談会をおこないます。  
日時 3月21日(月・祝)13時30分～16時20分(13時開場)

参加形式  
①会場参加 みんなくインテリジェン

トホール講堂(定員160名)

②オンライン(ライブ配信)  
(定員300名)

上映作品

「モンゴリアン・プリング」  
(日本語字幕あり、2012年)

座談会

ベンジ・ピングス(上映作品監督、  
オンライン登壇)

ジェニー(rapper、オンライン登壇)

ハンカー(rapper)

川瀬慈(本館准教授)

司会 島村一平(本館准教授)

※要事前申込(会場参加は本人を含む  
2名まで)、先着順、参加無料(会  
場参加は要展示観覧券)

※事前予約の方へ入場整理券を当日  
11時から本館2階会場入口にて配  
布します。

※定員に満たない場合のみ当日参加  
を受け付けます。

【申込期間】  
■一般受付 3月11日(金)まで

※友の会電話先行受付は終了しました。

## みんなく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通送迎バスを特別展の会期中に運行します。詳しくはみんなくホームページをご覧ください。  
※4月9日(土)に予定していた研究公演は延期となりました。日程は決まり次第お知らせいたします。

### 企画展

## 「焼畑——佐々木高明の見た五木村そして世界へ」

日本や世界の焼畑を事例にして、現代社会と焼畑とのかわり、日本文化のなかでの焼畑の「意義」について紹介します。  
会期 3月10日(木)～6月7日(火)  
会場 本館企画展示場

■関連イベント  
みんなく映画会

## 「焼畑から見た日本の文化」

日本列島では山地部を中心にして先史時代以来現在まで焼畑が行われてきました。焼畑をめぐる映画鑑賞と討論をとおして日本や地球にとって焼畑とは何かを考えます。  
日時 4月30日(土)13時～16時  
(12時30分開場)

会場 みんなくインテリジェントホー  
ル(講堂)(定員160名)

上映作品

「樺山——焼畑に生きる」  
(1977年)

討論 野本寛一(近畿大学名誉教授)  
川野和昭(元鹿児島県歴史・美術センター黎明館学芸課長)

池谷和信(本館教授)

※要事前申込(本人を含む2名まで)、  
先着順、参加無料(要展示観覧券)

※事前予約の方へ入場整理券を当日  
11時から本館2階会場入口にて配

## みんなくゼミナール

参加形式

- ①会場参加 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
- ②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
- ・要事前申込、先着順、参加無料
- ・当日参加受付あり(会場参加のみ、定員30名)

第519回

3月19日(土)13時30分～15時(13時開場)

## 焼畑は環境破壊か

——佐々木高明の研究とその後

講師 佐藤廉也(大阪大学 教授)  
米家泰作(京都大学 教授)  
池谷和信(本館 教授)

国立民族学博物館第2代館長・佐々木高明は焼畑研究の第一人者です。本ゼミナールでは、日本や世界の焼畑の歴史と現状をわかりやすく紹介しながら、現代社会のなかでの焼畑の意義について考えます。

【申込期間】

■一般受付 3月16日(水)まで  
※友の会電話先行受付は終了しました。  
※会場参加のみの開催です。オンライン配信はありません。

第520回

4月16日(土)13時30分～15時(13時開場)  
古代オアシス都市における人びとの暮らしと宗教  
——カフィル・カラ遺跡の発掘調査から

講師 寺村裕史(本館 准教授)

カフィル・カラ遺跡(ウズベキスタン)での食糧庫跡やゾロアスター教関連の木彫板の発見など、発掘調査の成果を紹介しながら、当時の人びとの暮らしや宗教について考えます。

【申込期間】

■友の会電話先行予約  
3月14日(月)～18日(金)  
定員30名、会場参加対象

【申込先】

国立民族学博物館友の会  
(千里文化財団)

■一般受付

3月22日(火)～4月13日(水)



カフィル・カラ遺跡のシタデル(要塞)近景(2014年)

## みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場 第5セミナー室(定員42名)

※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展示観覧券)、14時より整理券配布

※各回、開始30分前に開場

本館の研究者が「みんなくの展示資料」「調査している地域(国)の最新情報」「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。

3月13日(日)14時30分～15時15分

## パキスタン北部のシャマン「ピタン」

話者 吉岡乾(本館 准教授)

3月27日(日)14時30分～15時

## 日本の焼畑

話者 池谷和信(本館 教授)

## 刊行物紹介

■関雄二 著  
世界の考古学①  
『アンデスの考古学 新版』  
同成社 3,520円(税込)

南米の古代アンデス文明の出現から崩壊にいたる4000年以上にわたる歴史を扱った概説書。1997年の初版後、2010年に改訂版を出し、今回は10年ぶりになる。10年間の新たな研究成果を付け加え、内容を充実させている。



お問い合わせ

国立民族学博物館 広報・IR係

電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401

お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>

## 友の会

### 友の会講演会

受付フォームは友の会ホームページ内にあります。会場参加のみ、会員以外の方もご参加いただけます。

※会員：無料(会員証提示)  
一般：資料代500円

第522回 3月5日(土)13時30分～15時

## 病の語りにさぐる

——産後風と韓国女性の生活

講師 諸昭喜(本館 助教)

参加形式

- ①本館第5セミナー室(定員40名)
- ②オンライン(ライブ配信)(定員100名)
- ※要事前申込、先着順

韓国では、産後に適切なケアを受けることができなかった時に発症する「産後風(サヌブン)」とよばれる病があります。これはどんな病気で、なぜ人びとに広く知られているのか、なぜ女性たちは共通した思いをもっているのかなどを、病についての語りから紹介いたします。また、病をとおして韓国社会の女性が経験してきた生活についても考えます。

受付フォーム

<https://www.senri-f.or.jp/522tomo/>

第523回 4月2日(土)13時30分～15時

## 特別展「邂逅する写真たち」 ——モンゴルの100年前と今」関連 モンゴルとSDGs

講師 小長谷有紀(日本学術振興会 監事、  
本館 客員教授)  
山極壽一(総合地球環境学研究所 所長)

参加形式

- ①みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
- ②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
- ※要事前申込、先着順

持続可能でよりよい世界を目指す国際指標SDGs。17の目標の達成には環境問題の解決が大きく影響します。自然・人文・社会科学の総合的な視点で環境問題をとらえる総合地球環境学研究所(地球研)が設立されて約20年。地球規模の環境問題は解決に向かっていのでしょうか。地球研の取り組みについてうかがいながら、モンゴルを例に考えてみましょう。

受付フォーム

<https://www.senri-f.or.jp/523tomo/>

布します。  
※定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。  
※オンライン配信はありません。  
【申込期間】  
■友の会電話先行予約  
3月18日(金)～25日(金)  
定員30名

## 「Ainuひと」

日時 3月26日(土)13時30分～16時  
(13時開場)

参加形式

①会場参加 みんなくインテリジェン  
トホール講堂(定員160名)

②オンライン(ライブ配信)  
(定員300名)

解説 溝口尚美(上映作品監督、オン  
ライン登壇)

司会 齋藤玲子(本館 准教授)

※要事前申込(会場参加は本人を含む  
2名まで)、先着順、参加無料(会  
場参加は要展示観覧券)

※事前予約の方へ入場整理券を当日  
11時から本館2階会場入口にて配  
布します。

※定員に満たない場合のみ当日参加  
を受け付けます。

【申込期間】  
■一般受付 3月18日(金)まで

※友の会電話先行受付は終了しました。

### 研究公演

【絆——人をつなぐ太鼓】  
日時 3月20日(日)14時～16時30分  
(13時30分開場)

参加形式  
①会場参加 みんなくインテリジェン  
トホール(講堂)(定員130名)

②オンライン(ライブ配信)  
(定員300名)

出演 和太鼓絆

解説 寺田吉孝(本館 名誉教授)

司会 福岡正太(本館 教授)

※要事前申込(会場参加は本人を含む  
2名まで)、先着順、参加無料(会  
場参加は要展示観覧券)

【申込期間】  
■一般受付 3月11日(金)まで

※友の会電話先行受付は終了しました。

公開講演会

「イメージの脈動にふれる」

日時 3月25日(金)18時30分～21時  
(17時30分開場)

会場 オールホール  
(大阪市北区梅田)

定員 1800名

講演 中沢新一(思想家、人類学者)

報告 川瀬慈(本館 准教授)

パネルディスカッション  
末森薫(本館 助教)

司会 中沢新一×川瀬慈×末森薫

主催 平野智佳子(本館 助教)

国立民族学博物館  
毎日新聞社

※要事前申込、先着順、参加無料

※オンライン(ライブ配信)でもご参  
加いただけます。

※手話通訳あり

お問い合わせ先

本館 研究協力課 研究協力係  
06168787818209

アイヌの文化展示「ニユーアル

工芸コーナーの作品を一部入れ替え、  
展示数も増えました。ぜひご覧ください。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716

[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/) E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp





# マニラのアート巡りのすすめ

ふるさとの  
古沢 ゆりあ

滋賀県立美術館学芸員



『フィリピンアートみちくさ案内 マニラ編』  
(フィリピン・アート・ガイドブック・プロジェクト、2013年)

わたしは、フィリピンの美術について調査するため、二〇一一年から二二年にかけて八カ月ほど、マニラを中心にフィリピンに滞在した。そこでの調査もとにガイドブックを作った経験と、それによって広がった出会いについてお話ししたい。

## アート好き日本人が集う

二〇一一年、あるフィリピン人アーティストのイベントをきっかけに、マニラ在住・滞在中の四人の日本人女性が出会ったのがこのガイドブック・プロジェクトの始まりだった。アート情報をブログで発信している人、アーティスト、アートマネージャー、そして美術研究者のわたしである。

当時、フィリピンの美術界は、経済成長や国際的なアジア美術ブームもあり活発化していたが、アート巡りをした



アートの町アンゴノの芸術祭でパレードする張りぼて人形  
(リサール州アンゴノ、2012年)

い人が網羅的な情報を手に入れられるガイドブックはなかった。そこでわたしたちは、自分たちが出会って魅力を感じたフィリピン美術を伝えようと、ガイドブック作り着手することにしたのだった。国立の博物館から小さなギャラリーまで訪ねて回ったり、展覧会

のオープニング・パーティーに参加してアーティストと交流したりするなかで情報を集めた。

日本へ帰国後、いくつかの出版社に原稿をもち込んだものの、テーマが一般的でないなどの理由で出版は難しいと断られた。そこで、集めた情報を一刻も早く世に出したいという思いから自費出版とすることにした。四人のほか、翻訳家や漫画家にも協力をあおいたが、取材、執筆、編集、レイアウト、デザインなど主要な作業を自前でおこなえたのは各自のもてる力のおかげである。

アート巡りのガイドブックを作ってみました



日本のアートスペースでトークイベントをする筆者  
(東京都渋谷区、2013年)

## 古典から現代美術までを紹介

このガイドブック『フィリピンアートみちくさ案内 マニラ編』では、マニラの四つの地域と、アンティポロ、アンゴノなど近郊の町のミュージアムやギャラリー



賑わう野外アートフェア「アート・イン・ザ・パーク」  
(マニラ首都圏マカティ市、2015年)



国立美術館(手前)とマニラの街並み(マニラ市、2015年)

リー約五〇カ所を地図や解説とともに紹介している。合わせて、アーティスト、学芸員、ギャラリー経営者などへのインタビュー、歴史や文化に関するコラムも掲載している。  
古代の岩壁画や副葬品から、スペイン

## アートがつなぐ日本とフィリピン

ガイドブックが完成し日本とマニラで

植民地時代のキリスト教美術、二〇世紀のモダニズム、現代の若手アーティストの活動まで、幅広いテーマを扱う美術館や博物館を網羅している。また、図や写真をカラーで豊富に掲載し、日英対訳にしたのも、より多くの人がこのガイドブックを手にとって実際に訪れてほしいの思いからである。

販売されると、日本からフィリピンを訪問する美術関係者に歓迎された。例えば、「アーティスト・イン・レジデンス」(滞在制作)をおこなう人びと、交流事業で訪れるキュレーター(展覧会の企画者、美術館の学芸員)などである。一方、わたしにとって意外でうれしかった反響は、マニラの日本人駐在員とその家族からのものである。駐在員の家族のなかには外国生活での安全面の不安から行動範囲が限られてしまい、現地のことを知りたいと思っても気軽に叫ぶ機会が少ない人もいるという。わたしたちの本はそうした人たちに、ミュージアムやギャラリーという、文化に触れられる安全な外出先の選択肢を提供したのだった。実際、ガイドブックの刊行後、ギャラリーの経営者から「日本人のお客さんがよく来るようになった」との声が聞かれた。

そのほか、日本でもアートのスペースなどで関連トークイベントをおこなった。美術をおとした日本とフィリピンの交流の一助になったと思う。

フィリピンあるいは日本で、ガイドブックを見せて「これを作った人です」と自己紹介することで、相手に顔を覚えてもらい、つながりができることも増えた。結果として、このガイドブックを一番活用しその恩恵を受けることになったのはわたし自身かもしれない。

# しめ縄探訪事始

なかたに あやみ  
中谷 文美  
岡山大学文明動態学研究所教授

バスケットリ—はいわゆるカゴ類のことと思われがちだが、広義では加工した植物素材を編み組みして作ったモノも意味する。古来より、人は植物の部位をたわみやすい線状物に加工してさまざまに利用してきた。今号では、ワラの稈を利用した日本のしめ縄作りから、植物素材と社会との関係を探る。

## 始まりはこのことば

「しめ縄作るんが大変なんよ。何十本もあるからな」。  
二〇一九年六月、岡山県矢掛町の住民グループと留学生との交流イベントに飛び入り参加したときのことである。地元の神社で一〇月におこなわれる秋祭りの話が出た。居合わせた方の家がその年の大当番に当たっていると聞き、具体的な準備作業について何うと、開口一番出てきたことばがこれだった。

祭りの準備が一番大変なのがしめ縄作り？ この疑問から、わたしのしめ縄探訪が始まった。

探訪といっても大がかりなものではない。まずは神社の秋季大祭にかかわる一連の行事とその準備作業を見学させてもらうことになった。必要なしめ縄の長さは、かける場所によって細かく決まっており、本数も多い。かつての農家では子どもも含め、誰でも縄が編めて当たり前だったというが、今では縄編みができる人も減っている。さらにしめ縄は通常の縄と違って左編みでなければならぬため、ハードルが上がる。このときも大当番の親族の男性が用意できる分では足りず、困っていたという。結局、同じ町内の別集落で活動する「やればう伝承の会」を知り、ここにしめ縄の製作を一部依頼することになった。一



差し込むワラ束を渡す役や一方の端をもっておく役も含め、7人がかりでしめ縄を組む(岡山県矢掛町、2020年)

## グループでのしめ縄作り

大しめ縄の材料となるのは、赤米の稲ワラである。この地域では、しめ縄の場合、稈を叩いて柔らかくするワラ打ちをしたり、しなやかで編みやすい

すいとされるもち米のワラを使ったりはしないからわしとなっている。そのため、もち米以外の品種から稈が長く、少しでも編みやすいものを選んでいくそうだ。

三人の男性が三つに分けたワラ束をそれぞれ握り、小分けにした別のワラ束を差し入れながら捻って自分の左隣にいる人に渡すことで、しめ縄が編まれていく。総勢七人の手で組み上げた二本のしめ縄に、青刈りした稲ワラで作った梵天とよばれる飾りと紙垂をくくりつけ、支えとなる青竹に



完成したしめ縄を立てる(岡山県矢掛町、2020年)



日本一といわれる出雲大社神楽殿の大しめ縄。島根県の飯南町注連縄企業組合で製作されている。この組合は、各地の神社からの依頼で大しめ縄を製作しており、しめ縄に適した専用の稲栽培から作業が始まるという(島根県出雲市、2021年)

結んで立てる。午後いっぱいかかった作業が終わると、他のメンバーも一緒に懇談の時間となる。ワラにまつわる記憶や農業を含めた地域の生業の変貌にも話がおよぶ。

この会のメンバーにはまた、自分の家で縄編みをしてきた経験をもつ人も多い。昭和一〇年生まれの男性は祖父から縄編みを習い、自分で編んだ草履を履いて学校に通っていた。周りの子どももみな縄は編めたし、学校で縄編み競争などもしていたという。養蚕をする家では、蚕のための族をワラで編み、牛を飼う家では敷きワラが必要だった。

## 「ワラの文化」の変容と継承

宮崎清が詳細に描いているように、日本における「ワラの文化」は広く、深い。編み笠、蓑や草鞋、畳、莫蓆、箒、餅や納豆の苞、そしてしめ縄。稈



耐久性のある合織しめ縄も全国に広がりつつある(石川県珠洲市、2019年)

ばかりでなく、ハカマ(葉)、ミゴ(しべ)にいたるまで、どの部位も無駄にすることなく、それぞれの特性に応じた活用の仕方があった(『図説藁の文化』法政大学出版局、一九九五)。  
だが衣食住すべてにおいて、これらのワラ製品を必要とする日常はもうない。岡山県の南西部では、昭和三十年代以降、瀬戸内海沿岸の水島コンビナートに若い労働力が吸収された。他方、干拓地を中心とする平野部の農地では大型農業機械の導入が全国に先駆けて進んだ。米の収穫・脱穀・選別までをこなすコンバインにワラ切刃がついた機種が登場したことで、稲ワラは刈り取り作業と同時に切り刻まれるようになった。  
もはや稲ワラは、しめ縄や正月飾りのように特別な行事と結びつく形のみ、活用されるものとなりつつある。そのためにも、手刈りしたり、穂が出る前に青刈りしたりと、特別な段取りや人手が必要になってきた。「やればう伝承の会」ができたきっかけも、地元の神社のしめ縄作りが難しいという相談が舞い込んだことにあるという。

かつては当たり前だったワラとのつきあいが当たり前でなくなってきた今、誰がどのようにこの素材と向き合うか、これからの探訪は続きそうだ。

# モンゴル発のヒップホップの 動態に迫る

川瀬 慈 かわせ いづし  
民博人類基礎理論研究部

## 「モンゴリアン・ブリング」

原題：Mongolian Bling  
2012年 / オーストラリア / モンゴル語 / 90分 / DVDなし  
監督：ベンジ・ピンクス  
出演：Gennie, Gee, Quiza, MCITほか  
2022年3月21日(月・祝)のみんぱく映画会にて上映予定



モンゴル初の女性ラッパー、Gennie。メッセージ性の強いポリティカル・ラップを得意とする  
©Flying Fish Films & Binks Inc



モンゴルの「M」をハンド・サインする「ゲル地区」出身のギャングスターラッパー、Gee  
©Flying Fish Films & Binks Inc

モンゴルのシャーマン、ゾリクトバートル。  
シャーマンの祈禱歌とラップの類縁性を語る  
©Flying Fish Films & Binks Inc



映画「モンゴリアン・ブリング」は、モンゴルの首都ウランバートルを拠点に活動するヒップホップのミュージシャンをオーストラリア人のベンジ・ピンクス監督が記録したドキュメンタリー映画である。ダイン・バ・エンヘ (War and Peace)、Gee、Quiza、Gennie等、モンゴルのヒップホップシーンを牽引する魅力的なラッパーたちが紹介されていく。本作では、これらの人物のパフォーマンスの豊富な事例、そしてインタビュをとおし、ウランバートル、ひいては現代モンゴルにおける貧富の格差、環境問題、政治家の汚職、若者の風俗、音楽文化の変容等が、多角的かつ重層的に描かれていく。例えば、ウランバートルにおいて、低所得者が集住するゲットーであり、一般の市民からは敬遠されがちな「ゲル地区」出身のGeeは、作中で以下のように歌い、政治家を批判し、国家の行く末を案じる。

らった夫 そして自分勝手な親族／  
夫は口先で愛を誓うくせに 殴るし  
浮気する／幼い頃はいっぱいかまって  
もらえたけれど 成長するにつれ  
親族すらも信頼できないと気づかさ  
れたの／家族を背負わされるシング  
ルマザー／でも国家は冷たい もう  
十分すぎるぐらいサポートをして  
やったといつて突き放す

これらのラップを聴くと、ヒップホップがまさに社会のさまざまな問題を映し出す鏡だと言いたくなる。しかしながらQuizaは言う。モンゴルのヒップホップは、社会問題の指摘、他者の糾弾や揶揄、ずたずたに傷ついた個人の心情等、通常ヒップホップがとりあげる主題としてイメージされがちな内容を必ずしも扱うものではない、と。彼によればヒップホップの醍醐味は何よりも、それがモンゴルの伝統芸能との連なりの中に存在するアートであるということだ。これは本作における重要な論点である。モンゴルの口承文芸の担い手のバヤルマグナイが作中に何度も登場してヒップホップへの期待とともに語ることばが印象的だ。「ヒップホップ

お前たち(政治家)は自分の懐に金を貯める目的のためにモンゴルの未来を売りやがる／いますぐやめろ／できないことをできると嘘ぶく／よ／ちゃんと守れる約束についてだけ語れよ／民衆をネズミのように興奮させやがって 嘘ばかりついているなら お前たちをサポートするなんてごめんだね／自信たっぷり 偉そうな態度で歩きまわりやがって／結局は嘘をばらまくばかりじゃねえか／達成できるゴールについてきちんと説明してくれるのだったら ちゃんとお前たちに投票してやるさ／でも お前らは 今日も家に帰ってほくそえんでやがる ああ群衆をまんまとだましてやった てね／グロバリゼーションという名の大海原でモンゴルはまるでパドルをなくしたボートのように漂流するのさ

モンゴル初の女性ラッパー、Gennieは、首都で女性が生きていく苦労を以下のよう

にラップに乗せる。  
混乱した社会 人は皆平等である  
というけれど／ほんとのところそんなの嘘っぱち／こどもたち 酔っぱ

はモンゴルの伝統文化にルーツを持つ。彼の興味深く、堂々とした主張は、視聴者に極めて強いインパクトを与える。モンゴルにおけるヒップホップが、決して米国のポピュラー文化の二番煎じではなく、すでにモンゴルに存在している地域社会の口承文化やシャーマニズムといわば「地続きにある」という発想。それに呼応するかのようなラッパー、Quizaによる同国の伝統楽器とヒップホップの融合の描写、さらにはベンジ・ピンクス監督による映像表現、すなわち薪割りや調理、走行する列車や酒の空き瓶が触れ合う音・風景が、あたかもサンプリングされて作られたトラック(ラップのバックミュージック)のように作中に効果的に挿入され、本作にいろどりを加えていく。

ヒップホップという、今や世界的な現象の、局地的な発展について、ここまで厚手に描いた快作は存在しないであろう。



馬頭琴を演奏しながら叙事詩を歌い語る、口承文芸の担い手のバヤルマグナイ  
©Flying Fish Films & Binks Inc

# 「左は東」で 「右は西」か？

からしま ひろよし  
辛嶋 博善

人間文化研究機構 総合人間文化研究推進センター研究員

モンゴル語には、方位の東西南北をあらわす単語があるが、それは前後左右をあらわす単語と共通している。北が上に描かれる地図に慣れている者にとってややこしいのは、南と前（オールド）、北と後（ホイド）、東と左（ズーン）、西と右（パローン）がそれぞれ共通していることである。京都出身者であれば「天子南面す」という思想に基づいた右京区と左京区の関係と同じで受け入れやすいのかもしれないが、関東育ちのわたしはそうもいかない。モンゴル語を学び始めた当初、「ひだりはひがし」などと語呂合わせのようにして覚えたものである。

こうした一見不可解な組み合わせであるが、草原にたてられた天幕、ゲルに座ってみると合点がいく。ゲルはおよそ南に扉を向けてたてられる。そしてその奥が上座になるが、そこに北を背にして扉の方に向かって座ると左手が東に、右手が西に、そして正面、すなわち前が南になる。天子ならぬ家長が上座に座ると南面するというわけである。このように扉を南に向けてゲルをたてるのは、一説によれば冬季に吹き付ける北風に対して扉から風が吹き込まないようにするためだという。

とはいえやはり、方角という絶対的なものと前後左右という相対的なものを同じ単語で指し示すということは、ときとして混乱の種になる。タクシーなどに乗った場合、「右に曲がって」とお願いしたつもりが、運転手は西に向かってしまうということが決してめずらしくない。モンゴルにおいて、草原に暮らす遊牧民はもちろん、都市部に住む人でも前後左右よりも東西南北を

強く意識している人は少なくないと感じる。西か右かという誤解を避けるために、日本人留学生などは「右手の方へ」、「西の方角へ」といった言い回しを身に付けることになる。

ただ、こうした方策が常に通用するとは限らない。以下はモンゴル国南西部へ調査旅行に行ったときに聞いた話である。草原で道に迷った運転手が地元の遊牧民に西はどちらか尋ねたのであるが、この運転手、南へ行ってしまったというのである。中国との国境に近いその場所は地形の関係で冬季の風が西の方から吹く。この場所はほぼ東西に走る2本の山脈にはさまれた、「ホーロイ（喉）」とよばれる地形になっており、地元の人も一方向に風が吹くのだと決まって説明する。それゆえこの場所ではゲルをたてる際に西を背にし、東の方に扉を向ける、つまり、西が後ろに、南が右になってしまうのである。とすると、運転手が尋ねた「西＝右」に対し、地元の遊牧民の答えが「右＝南」となってしまったのである。結果、運転手は南の中国との国境の方へ向かってしまったのだという。



ゲルの扉は南向きにたてられるのが通例である（ヘンティー県、2017年）

# 『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

## 国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/)

## 月刊みんぱく 2022年3月号

第46巻第3号通巻第534号 2022年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 齋藤晃 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、再生産可能な大豆由来のインク、環境に配慮したFSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



# 月刊みんぱく

2022年

3月号

## 編集後記

本号の特集は100年前と今のモンゴルを写真で比較する特別展に関するもので、それぞれの執筆者が異なった視点で比較の対象を扱っている点が興味深い。100年という時間はふつうの人の人生より長いので、とても昔のこのように思える。一方、自分が生きてきた時間を差し引くと、それほどでもないように思える。この時間感覚の違いは何だろう。

わたしたちの調査地では時を経て世代が変わり、古い文化習慣を詳しく知っているのは、外部の文化人類学者だけといった事態になる。故江口一久さん(えぐちかずひさ)はカメルーンの昔話を収集したが、月日が経って世代が移り変わると、それを現地の子どもたちに語り聞かせるのは自分だけになったと言っていた。

ところで二十数年前、ウランバートルに行ったことがある。改めて思い返してみると旅行したのは100年の最後の4分の1に相当する時期だったわけである。この四半世紀のあいだの変化がどんなものなのか、今日を映し出した写真から探ってみたい。(三島禎子)

次号の予告 4月号

特集「アフガニスタンを外から」(仮)

## 国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

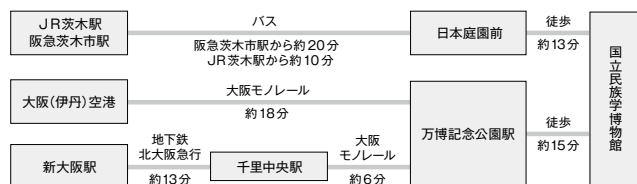
休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)

年末年始(12月28日~1月4日)



### 主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



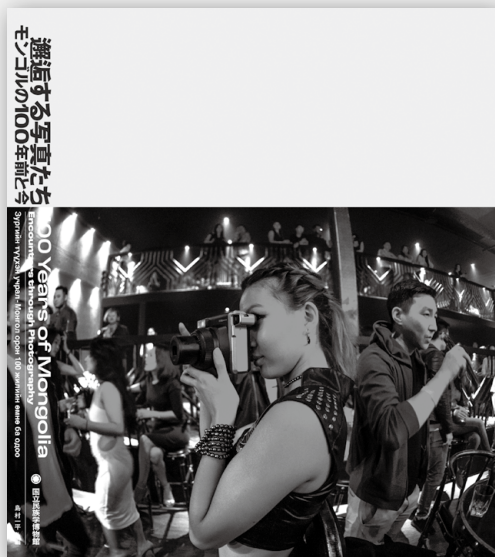
みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



まもなく開幕、国立民族学博物館の特別展と企画展

# 展示関連書籍のご案内



編者：島村一平 発行：国立民族学博物館  
本文200頁、H225mm × W200mm  
2,530円(税込)  
ISBN:978-4-906962-98-3 C1039

## 特別展図録

### 『邂逅する写真たち —モンゴルの100年前と今—』

100年前の探検家たちがとらえた聖なる都市の「黄の宮殿」や「エキゾチックな」遊牧民の姿。現代の写真家、B・インジナーシが見つめる高層ビルが林立するウランバートルや、都市周辺の「ゲル地区」での人びとの暮らし。100年の時空を越える出逢いをテーマにした特別展で紹介される写真をふんだんに掲載。新しいモンゴルの姿を発見できる写真集のような1冊。

\*カバーは2種類から選ぶことができます。



国立民族学博物館友の会機関誌  
『季刊民族学』にも関連号がございます

日本・モンゴル外交関係樹立50周年記念特別展

## 邂逅する写真たち—モンゴルの100年前と今

2022年3月17日(木)～5月31日(火)  
国立民族学博物館 特別展示館



国立民族学博物館友の会機関誌

『季刊民族学』177号特集

### 「焼畑と文明—五木村から世界へ」

焼畑研究の第一人者である佐々木高明は、1958～60年に「最後の焼畑」を調査するため熊本県の五木村を訪問した。焼畑とは人類にとってどのような営みなのか、日本における焼畑のはじまり、世界の焼畑の現在、焼畑が現代文明になげかける価値とは何か。佐々木高明の焼畑研究の原点の地、五木村から発信する。

発行：公益財団法人 千里文化財団  
全104頁、A4判  
一般頒布価格：2,750円(税込)  
友の会会員頒布価格：2,200円(税込)

本誌2022年2月号でも  
関連の特集を組んでいます



企画展 **焼畑**—佐々木高明の見た五木村、そして世界へ

2022年3月10日(木)～6月7日(火)  
国立民族学博物館 本館企画展示場

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ  
オンラインショップ「World Wide Bazaar」

e-mail: shop@senri-f.or.jp ※水曜日定休  
https://www.senri-f.or.jp/shop/